

## 様相概念をめぐる空間理論の体系化と 創造的な建築・都市設計による建築界への貢献

正会員 原 広 司 君

原広司君は、1959年に東京大学工学部建築学科を卒業し、同大学院博士課程を修了後、東洋大学助教授を経て東京大学生産技術研究所助教授、同教授を歴任し35年にわたって教育・研究に従事した。現在は原広司+アトリエ・ファイ建築研究所にて建築設計に従事しているが、設計活動は大学における教育・研究活動と並行して続けられてきた。空間理論の展開と理論に基づいた建築設計活動は同時代の建築界に大きな影響を与え続けている。

同君の業績は多岐にわたり、空間理論研究と設計活動が表裏一体で展開されてきているが、まず建築・都市設計についての業績を以下に年代別に要約しておく。

活動を開始した1960年代には「有孔体の理論」を提唱している。建築空間は、空間単位、境界面としての被覆、作用因子、作用因子の運動を制御する孔から構成されるとし、建築設計とは「閉じた空間」に穴を穿つ行為となるとしている。その結果、建築は有孔体の集合として姿を現すものであるとし、理論を体現した作品として1968年の慶松幼稚園が挙げられる。1970年代になると「内核をもつ住居」の形式を考案している。これは住居の内部に自然を呼び込み、都市の街路を再構築するために、住居に都市を埋蔵するという試みである。この段階では、被覆に二次元の孔をあける作業は三次元の孔をつくる作業へと転換されるとして、初期の代表作の一つといえる1972年の栗津邸を含む一連の「反射性住居」を設計している。1980年代になると理論は飛躍的に展開し、四次元的な孔をつくる仕掛けとして「多層構造」という空間図式に注目するに至っている。多層構造は時間を空間化するもので、記憶や意識の働きを説明する潜在力を持つとし、多層構造の各層を横断する「経路」に応じて、現れ、傾向、佇まい、雰囲気など様々な「様相」が誘起されるという。同君はこの「様相」の概念が、近代建築を主導した「機能」に代わる現代建築の主導原理であると指摘し、様相論的建築を現代建築の課題として措定している。このような理論展開の中で生まれた作品には、日本建築学会賞を受賞した1986年の田崎美術館、同年のヤマトインターナショナル、1993年の梅田スカイビル、1996年のJR京都駅、2000年の札幌ドームなどがあり、同君はこれらは自然や宇宙を思わせる「世界風景」を映し出す作品であるとしている。

また同君には空間理論の体系化においても高い業績がある。同君は近代建築の本質が「均質空間」にあり、新たな建築表現にはその均質空間を超える空間の発見が不可欠であるとして様々な活動を重ねてきた。その代表的なものとして親自然的な空間を求めての海外集落調査が挙げられる。調査の成果は『住居集合論 1～5』（鹿島出版会、1973～1979年）、『集落への旅』（岩波書店、1987年）として公刊され、大きな反響を呼んだ。また場の理論など数学的な概念を駆使して「空間理論」の研究を継続し、それが前述の「様相」の概念を中心とする理論に結実している。すなわちグラフ理論・活動等高線論・位相空間論などに基づく数学的な空間研究であり、合わせて建築・都市設計の実践などを通じて発見された、領域・境界、場・中心、場所・近傍、記号場、経路、様相などの空間の言葉の体系化を進めてきた。これら

に基づく空間理論の体系化は、設計原理を“もの”から“こと”へと転換する方法の提案であり、現代建築を見わたす壮大な空間理論として大きな注目を集めている。こうした業績は新建築学大系を始めとする多数の出版物の中で発表されてきた。

以上に述べた永年にわたる同君の設計・研究業績は、15冊を超す著書・作品集・雑誌特集、500編以上の論文・記事にまとめられ、国際的にも高く評価されており、建築・都市設計分野の発展に大きく寄与している。また教育面においても多くの人々に影響を与え、門下生からは現代の日本を代表する建築家あるいは日本建築学会賞受賞者が何人も輩出していることは特筆されるべきであろう。

よって、同君の功績に対して、ここに日本建築学会大賞を贈るものである。